

東海大学建築会卒業設計賞 2017

審査結果

KD最優秀賞

小野 里紗

うつろいのある建築
-都市の裏・渋谷川に自然を感じさせる空合いウォーク-

KD優秀賞

稲葉 理夏

わたしの時間
-がんと闘う子供たちのためのケアハウス-

KD佳作賞

名畑 碧哉

自己相似性建築
-都市を内包し、自然を感じさせる多層キャンパス-

柘田 祥子

光と影が織り成す渋谷駆け込み寺
-都心における若者達のためのフォースプレイス-

今年の審査について

昨年に引き続き、今年のKD賞審査も座談会形式のトークセッションによる審査方法で行った。審査員構成は若手建築家、研究者OB・OG計6人に加え、昨年優秀賞に輝いた大学院生一人が加わったのは今年の新試みだ。またもう一つの試みとして一次審査においては3年生の票入れシステムも導入することにした。それも学生を含め、意見が飛び交いやすいフラットな場の中で、肩の力を抜きながら、限られた時間の中で全てを出し切れる審査会を目指したからである。

今年は審査員に対して梗概の前もった公開が無かったため、事前情報が全く無く始まったポスターセッションからの一次審査であった。そのため個々のプレゼンテーションが大事であったのも特徴であろう。全体を満遍無く見ていくためには一作品に当てられる時間は決して充分では無く、発表者の慣れないプレゼンテーションから審査する側が内容を見落とし、早とちりしてしまうことは本意ではない。その救済という意味でも学生票を設けたことは作品を見返す良い切掛けになったのではないかと思う。

一次審査で9作品に絞り込み、2次審査ではそれらの作品模型を囲んでの座談会。出来る限り色々な角度から作品を評価しようという審査員達の熱心な姿勢は先輩達で構成する審査会ならではの光景であろう。4作品に絞った最終審査は公開することは叶わなかったが、各々の個性あふれる作品の評価に順位付けをすることは審査員達を悩ませたものの、話し合いを重ねて苦渋の決断で最終決定に至った。その経緯こそ次年度は公開出来るように検討して行きたいと思っている。

昨年から引き続くこのスタイルでのKDA審査会を軸に、学生とOB・OGの垣根を無くして相互に刺激し合いながら成長して行ける環境が、徐々につくられて行くことを切に願っている。

司会進行 富永哲史

鈴木 貴詞

鈴木貴詞/スズケン一級建築士事務所
1974 名古屋市生まれ
1998 東海大学工学部建築学科卒業
2000 東海大学大学院工学研究科建築学専攻修了
2000-2005 (有)アトリエ・チンク建築研究所
2005-スズケン 設立



皆さんの力作すべてにコメントを寄せたいのですが、ここでは4作品に絞って講評します。

中村浩貴さんの作品「知的障害者施設を再編する」は、まずなぜこの作品を作ろうと思ったかのストーリーに惹きつけられました。拝見した作品の中で設計者としての視座が最も定まっている作品と感じました。また、既存建物を題材として選び、その問題点を浮き彫りにしようとした着目点も評価できます。偏った建築計画により計画された施設建築の是正を目指す姿勢は、題材の施設に限らずあらゆる建築に共通する問題を含んでおり、設計内容に対する期待が膨らみます。しかし、その意図とは裏腹に模型や図面がそれを表現するには至っておらず残念でした。デザイン力を磨くことであなたの意図が人に伝わります。是非今回のテーマの追求を続けてください。

名畑碧哉さんの「自己相似性建築」で表現しようとしていた人工的な自然体験は、人工物で自然に近づきたいという素直な欲求をストレートに作品にぶつけそれを見事にまとめ上げているところを評価しました。

柘田祥子さんの「光と影が織り成す 渋谷駆け込み寺」は敷地の坂道形状と複雑に入り組む道路の交錯と、建築の造形が融合して質の高い空間を創造することに成功している点を評価しました。

小野里紗さんの「うつろいのある建築」は、天候や雨で生まれる微妙な表情をキャッチする提案が、繊細な図面や大きな模型で表現されており想像力をかき立てられました。反面、スケールアップした模型の粗が目立ちその繊細さが失われてしまった点が残念でした。



横尾 真

横尾真/OUVI代表
1999 東海大学第二工学部建設工学科卒業
2001 東海大学大学院工学研究科建築学専攻修了
2001 池田昌弘建築研究所
2004 OUVI 設立
2016 東京理科大学大学院理工学研究科建築学専攻後期博士課程修了



ポスターセッションの時27名の発表者全員に、それぞれ2分間の持ち時間を設定し、プレゼンテーションしてもらった。たったの2分で作品のすべてを説明することは不可能であるが、予想以上に饒舌で、そして軽快な学生たちをみて、少し驚いた。それでも、その大半は自身が設計した建築への言及には至らず、その背景にある問題定義、又は設計のきっかけとなった記憶などに費やされていた。私的な意見ではあるが、社会に対する問題意識、コンテクストをリサーチして読み解く鋭さは必要不可欠なセンスであると同時に、その延長線上にはきっと、新しい空間や、わくわくする建築をみつけることは難しいように思う。どこかできっと、ジャンプしなければいけない。

小野案は、透明な傘のようにもみえる器が渋谷と代官山をつなぐ街中にプロットされ、それらがつくり出す陰は確かに、魅力的な外部空間に思えた。一方で、人の居場所に関する提案は乏しく、器が一転して単なる屋外装置にも見えてしまい、空間の希薄さを露呈していた。もし、点在する筒型の透明な建物が同じ器の形状を有して、そこにあるベキストラクチャーまで思考が及んでいたならば、新たな建築を喚起することができたように思う。それでも、この作品のもつ可能性に一票を投じた。

梶田案は居場所のない子供たちへのフォースプレイスを提供するという案。敷地は渋谷の中でもユニークな場所で、緩やかな階段状の土地に複数の狭い路地が点在し、隠れ家的飲み屋やレストランが散在する。当然昼間は物静かな、住宅街のような場所でもある。そこに台形や円錐形といったボリュームを組み合わせて、魅力的な隙間空間をつくりだしていた。プログラムに対する建築的配慮や敷地の高低差に対する提案にかけるなど、どこかあっさりしたまま終わっている印象を受けたが、リサーチからジャンプした造形力を評価した。

名畑案は高層ビル群のファサードから自然を感じ、基準階の反復がその魅力に還元されるというダイナミックな感性、卒業設計に対する熱量と作品の巨大さは群を抜いていたと思う。ともすると、今の都市が抱えている問題として退屈な景観をつくる高層建築に対する批評とも受け取れる点を評価した。一方で、手法にひっぱられて、そこから生まれた空間がどのような効果を生んでいるのかという視点、また構造的制約の強い高層建築において基準階の喪失が意味することへの問題意識の欠如が、他の作品に一步及ばなかった理由だと思う。

今振り返ると、卒業設計は建築人生のスタートラインですらなく、その準備期間だったような気がする。みなさんの今後10年のがんばりと、いつかOBOGの審査員として、ここに戻ってきてくれることを期待しています。

柴田 木綿子

柴田木綿子/しばたゆうこ事務所
2002 京都精華大学デザイン学科建築分野卒業
2002 東海大学大学院岩岡研究室研究生
2006 吉村靖孝建築設計事務所
2010 しばたゆうこ事務所 設立
2016 ICSカレッジオブアーツ非常勤講師



私たちの卒業設計の頃は9.11の直後でその衝撃を受けつつも、アメリカで起こった事件はそこまで学生の作品に影響を及ぼすことはなかったように思う。今回の卒業設計の審査では数々の社会問題がこれほどまでに根深く学生の作品にまで影響していることに、まず驚きを隠せなかった。それを誠実過ぎると感じつつも、時代性だと読み替え、中でも建築的な姿勢が強い作品を評価した。

「小野案」
都市部の公共空間はその「公共性」がしがらみとなり、自然な人の振る舞いを過剰に制限する傾向があるように思う。道路は通過する目的だけを果たし、その中で雨は「行き交い」を妨げるものでしかない。小野案は雨をエレメントの一つとして扱い、傘のようなルーフの点在が作り出す「ミチ」は、淡々とした空気の流れる渋谷駅の裏通りに「よりどころ」を感じられる景色を作り出す事に成功している。不規則なルーフ下の空間は「軒下を借りる」というふるまいを想起させられ、寛容な公共空間としての可能性を感じさせられた。

「梶田案」
「フォースプレイス」という定義が曖昧なものを考える上ではもう少し周到的な思考が欲しかった。奇しくも、形態操作によってできた隣のビルとの異質な隙間に「フォースプレイス」が見えたように思う。

「中村案」
昨年知的障害者施設での殺傷事件は社会にこの類いの施設の「あり方」を問いかけた。その中で中村案は3種類の屋根を持つ空間によって施設を再編することで、施設の中に「街並み」のような景色を作り出し、地域や家族との繋がりを作り出そうとするものである。屋外から各諸室への直接的なアプローチによって、閑散とした外部空間が「にぎわい」を獲得したように思う。ただ、外部空間の連続的なつながりが感じられず、「地域との結節点」としてのふるまいに関しては疑問を感じた。

最後に、「平吹案」
取り上げる社会問題も目新しく例を見ないもので興味深かったのだが、何より彼が楽しそうに自分の作品を説明する姿に襟を正される思いになった。題材は様々であれ、そこに希望を感じられるプレゼンテーションというのは人の心を打つ。今回は入賞を逃したが、彼の姿勢には賞賛を送りたい。

稲坂 晃義

稲坂晃義 / 千葉工業大学 助教
2002 東海大学工学部建築学科 卒業
2005 慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科修士課程修了
2010 東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻博士課程修了
2009 東京理科大学工学部第一部建築学科 補手
2010 東京理科大学工学部第一部建築学科 助教
2015 千葉工業大学工学部デザイン科学科 助教
2016 千葉工業大学創造工学部デザイン科学科 助教



卒業設計とは、大学4年間の集大成でもあり、将来建築に関わる道に進んだ際の試金石になるようなプロジェクトであってほしいと願っています。私も15年前に卒業設計で東海大を卒業し、当時取り組んだテーマは今でもことあるごとに戻ってくるテーマになっています。今回の講評・審査では、制作者本人たち独自の切り口で現代社会における問題発見し課題として問題提起できているか？掲げた問題・課題の解決のためのエビデンスをリサーチからデザイン提案に至る過程においてその成果が得られているか？またそれらが他者に伝わるプレゼンテーションによって表現できているか？などを評価ポイントとして重視しました。

審査対象となった全27プロジェクトを概観すると、個人的な思いを動機とした問題や課題に取り組んだ提案が多かったように思いました。その中でKD最優秀賞の小野里紗さんのプロジェクトは、サイトである渋谷川周辺の緻密なリサーチによってその場所の特性を客観的に捉えているところにとっても好感がもてました。本来、自然や季節を感じられない都市空間において「天候をすくい取る器」というシンプルなアイディアを導入し、都市の表と裏を縫合するように配置されたバスやたまり場は、高い公共性を帯びた空間を形成しているように思いました。リサーチに裏付けられた新しい公共空間のあり方や人々の居方、自然や季節を少しでも都市空間ににじみ出てくるような仕組みが示された良い提案にまともな思いをしました。

他方でKD佳作賞の名畑碧哉さんのプロジェクトは、我々が卒業設計を行ったころによく見られた空間モデルの提案として懐かしさを感じました。実際の建築事例の徹底したリサーチから抽出した要素を抽象化し、それらをパーツとして一見複雑に見えるが自己相似的な反復による規則性を併せ持った高層建築として組み立てる試みについては可能性を感じ、名畑さんの建築に対する熱い思いを感じました。この他にも、稲葉理夏さん、梶田祥子さんのプロジェクトも、それぞれ現代における重要な問題や課題に真剣に対峙している姿勢が感じられ好感が持てました。

まだまだ荒削りではあるものの可能性を秘めたプロジェクトがいくつかありました。それらに共通するのは、対象とする物事をよく観察し徹底的にリサーチを積み重ねた上に、自分自身の感覚や思いを重ね合わせて、デザイン提案を試みたことだと思います。建築、空間、はたまた場を作ることは、独りよがりでの個人的な思いだけでは成立しません。様々な情報を紡ぎ合わせ、それをエビデンスにして答えを導出し、それを他者や社会に伝え訴える意識をもってプレゼンテーションすることができて初めて社会的な強度を持った卒業設計になると思います。卒業設計はまだ終わっていません。むしろこれからが本番。卒業設計をきっかけに、さらに広い視野を持って物事を観察し、思考と発想を繰り返しながら探求し、自分なりの「建築」を人生かけて仕上げていってくれることを期待しています。

齋田 武亨

齋田武亨/本瀬齋田建築設計事務所
1979 茨城県生まれ
2003 東海大学工学部建築学科卒業
2005 東海大学大学院工学研究科建築学専攻修了
2005 隈研吾建築都市設計事務所・設計室長
2015 本瀬齋田建築設計事務所共同主宰



全体的としてプレゼンテーションへの具現化に苦勞がみられたが、対話を通じて根底からの空間への興味や莫大な作業の蓄積が背景に感じられる、潜在的な熱量が溢れる卒業制作が多かったように思う。

小野案は、既存建築群の隙間を縫い、薄く小さなチップを集積したストールを優しく建物に巻いたような街路をつくる、ヒューマンスケールな屋外装置の提案で、微細に異なる透過性を与えた庇による陰影や、緻密な調査を裏付けに雨水や日照を利用する、変化に富んだ光溜まりや立体感をもつ「ほぼ屋外」な空間モデルは独創的であった。減築による密度調整や、既存建物毎のアプローチを丁寧に汲むプランニング、都心市街地ゆへの歩行者量を前提に成立させた街区デザインからは、優れたコンテキスト読解力や都市スケールでの補完意識が伺え、現代的で高度な建築的技術を感じさせた。これら多くの魅力を顕在化した対話力に頼もしさを感じる反面、建築化やリアリティに気をとられ不用意に決めたであろう単柱が安易に見られ惜しまれた。

異常性を感じる濃密さで空間にストーリーを与えた木村案、難解なテーマと敷地形状に取組みながら秀逸な設計能力で建築化した稲葉案や、同じく多彩な屋根下空間を街になじませた寶案、デザイン性の高いプレゼン模型が光った柏木案や丸山案、これらは共通し、独自の魅力を的確に空間表現できれば、より良い結果が残せたように思う。

厳正さが問われ作品完成度を尊重せざる得ない審査の傍ら、本賞の、大学院生や後輩の意見をも反映するアットホームで参加型の審査方式は、対話力や人間力が問われ、先進的で興味深い。社会的な説明能力を問われやすい昨今における設計の言語化育成の観点でも有用性を感じた。本賞設立以降の大学や建築会の功績に敬意を表しつつ、自身を含め、今後も継続し学生の育成に少しでも貢献できることを願います。

伊藤 州平

伊藤州平 / C+A CAI
1981 札幌市生まれ
2003 東海大学工学部建築学科卒業
2005 東海大学大学院工学研究科建築学専攻修了
2005-2008 Richard Blich Architects
2008- C+A CAI



建築や都市、社会に対して自分なりの視座や気づきを発見し、そこから空間や場をデザインしてどんな新しい建築の可能性を提示するか、、、それが"建築"を設計することだとすると、卒業設計はとても有意義な機会である。そのため、個人的には「審査」という作品の全体性とその完成度を評価するというよりは、主観的で偏りがあるにせよ、建築や都市への強いモチベーションを感じた学生の作品を評価し、審査の先に更なる発展の可能性が感じられる作品を選んだ。そのなかで、名畑案と小野案はとてもチャレンジングであった。

名畑案は、設定した断面的に縦長のプロポーションのボリュームを相似的に拡大縮小し重ねあわせて空間をつくった力作である。平面計画的には合理性の低い縦長のプロポーションをあえて採用することで、フィクショナルな空間をつくりだしている。感覚的に魅力的な空間になることを信じて作られた大きな模型からは発展の可能性を感じた。ただ、『大学』というプログラムに対して解かれていないこと、またモデルとしても手法の提案にまで達していないことが、作品として全体的に弱い印象を与えている。

小野案は、都市における人の流れを陽射しや雨などの非人工的なパラメーターを用いて浮きあがらせ、現象的に空間を発現させることにトライした意欲的な作品である。様々な透過性の傘を離散的に街路へ配すことで、季節や天候によってそれらを通過・滞在する人々のアクティビティの変容を期待している。ただ、デザインされた傘が傘でしかなく、様々なスケールバリエーションやレイアウトを含め、空間や場としての奥行きがスタディされていると良かった。それでも、敷地全体で表現された模型では光や影が綺麗に落ちており、そこに人々のアクティビティがオーバーレイされた時に、都市に対して景色としての空間が発現されるという美学に魅力と今後の発展性を感じた。

しかしながら、名畑案と小野案に比べ、亀井案、稲葉案、山口案、平吹案、比佐案、柏木案、梶田案、寶案は、丁寧に設計され一定の完成度があり卒業設計として評価されるべき作品である。その中でも稲葉案は、プログラムの設定と計画的なプランニング、敷地の選定とその解き方が上手く秀作である。特徴である敷地谷部に建築を浮かせ谷を開放する構成と、提案するケアハウスの管理を既存病棟に依存することで、各ユニットへのアプローチが空間的にもプログラムのにもフリーになっており、閉ざされがちなケアハウスのユニットが内部に閉鎖的に完結することなく、プライバシーを保ったまま自然とダイレクトに繋がれる構成をつくりだしている。また、建築下部の谷は広場的に利用され、各ユニットとそれらをつなぐランダムなブリッジが離散的に浮遊し興味深いシークエンスがつくれるなど、全体的に良くまとめられた作品である。

最終的にKD賞に小野案を選んだが、卒業設計としてデザインされた空間をプレゼンテーションしきれているかと問われれば弱い作品でもあった。それでも、独自の視点とユニークなアイデアの展開に可能性を感じ評価した。ただ、一つ断っておくと、卒業設計に対して発展の可能性だけを評価し、全体の完成度を重視しなかったという訳ではない。稲葉案は秀作であり高く評価できたが、総合的な作品の魅力というところで残念ながら惜しくも次点となった。来年度も意欲的な卒業設計を期待したい。

本井 加奈子

本井加奈子/芝浦工業大学大学院生
2014 住宅課題賞受賞
2016 TD賞 KD優秀賞受賞
2016 東海大学工学部建築学科卒業
2016 芝浦工業大学大学院 堀越英嗣研究室在籍



KD賞の審査で初の試みである学生審査員という立場で卒業設計を審査させていただき、後輩の作品を講評しながら私自身も学ぶものがありました。

小野さんの案は都市にある数少ない自然やその移り変わりを建築によって感じさせるというものでした。最終的に形として出てきたものに対して「これは建築なのか」という議論がありました。しかし、雨が降ると人の動線が水の動線になり、天候によりその建築のあり方が変わるという非常に柔軟な建築の提案は小野さんの最初に掲げた問題を解決しており、また新しい建築のあり方を提案しているのではないのでしょうか。

稲葉さんは自身の体験からスタートしていて、とても情熱を持って取り組んでいることが伝わってきました。病院という難しい施設に取り組んでいましたが、谷状の敷地を生かした空間の作り方や居室の計画などとてもスマートにまとめあげられていました。

木村さんは男女の出会いの場を作り、未婚化、晩婚化という現代社会の問題に取り組んでいました。木村さんはまずプレゼンテーションが群を抜いてすばらしかったです。なにを聞いても理論的に答えが返ってくる姿勢からも真摯に取り組んでいることがわかります。細かなゾーニングやレベル操作による場の分け方も説得力がありましたが、建築空間としてもっと追求できたのではと感じてしまう部分もありました。

先輩の立場として皆さんに伝えたいことは、ここでの評価が全てではないということです。見てもらう人が変われば評価も変わります。自分の提案のいいところや魅力というのは、自分自身では気がつきにくい場合があります。卒業設計を終え、少し時間が経って見直すと新たな発見もあると思います。また、いろいろな人に見てもらうことで自分の視野も広がります。なので後輩の皆さんにはぜひ外部の卒業設計展に出席してほしいと思います。卒業設計の提出はゴールではなく、自分の考えを発表し伝える事のスタートでもあります。みなさんの考えをどんどん発信してってください。